

令和5年度 経営協議会学外委員から得られた意見と対応状況について

	議題	学外委員からの意見	本学の対応状況
1	令和5年度科学研究費助成事業の採択状況について	科学研究費補助金の採択状況の件数・金額の増減等の事実のみ資料に記載されているが、何を評価するためにこの数値をとりまとめ会議に報告しているのか等、前提にある考えを説明いただき、もう少し踏み込んだ考察をしていただきたい。	科研費や共同研究・受託研究等の外部資金の獲得状況を複数年に渡って分析し、分析結果をもとに本学として組織的に取り組むべき施策内容等の検討を進めている。今後エムエススクエアの研究戦略部門などで、研究IRの効果的実施とそれに基づく対策の提案や必要な予算の確保などに向けて対応していく。
2	博士後期課程学生の支援について	海洋AIコンソーシアムの参加企業について、メーカーが少ない印象を受けた。造船や船用機器のメーカーはAI人材を必要としていると思う。東京海洋大学は実学に根差した教育を行っており、メーカーとの関係も重要だと思うので、そういった企業へコンソーシアムへの参加を打診してはどうか。	<p>2023年度の海洋AI公開セミナーにおいて、これまで海洋AI勉強会Plusで蓄積されてきたネットワークにより造船や船用機器のメーカーの他、航海学会や船用工業会等の関連団体を通じて開催案内を送付した。結果として、新たにコンソーシアム参画への意欲を示した船用機器のメーカーの他、海洋産業界以外を含む企業等6社にアプローチをしている。今後も本学の教育と関連する企業等に働きかけを強化していく。</p> <p>※「海洋AI公開セミナー」では、卓越大学院プログラムの実績を広く公開し、更なる連携を推進するため、学生・教職員やコンソーシアム参加機関による海洋×AIの最新事例等を発表。2023年度のセミナーでは120名が参加した。「海洋AI勉強会Plus」は、プログラム学生や海洋関連産業界・研究機関を対象として、気軽に意見交換ができる海洋×AIの勉強会として定期的に開催している。</p>
3	東京海洋大学海の研究戦略マネジメント機構の設置等について	<p>すばらしい研究成果があっても、社会実装に結び付けるには特別な能力や経験を有する人材が必要であり、そういった人材をエムエススクエアに配置できるかがポイントである。また、ジョイントベンチャーなど、外部人材をフレキシブルに使っていくことも鍵ではないか。</p> <p>また、社会実装を進めるにあたって、本学のシーズと、企業のニーズをいかに上手く組み合わせるかが重要。エムエススクエアのやりたい方向性について、関連企業にもご説明頂き、ニーズの把握や連携強化を行ってほしい。</p>	<p>エムエススクエアでは、主として産学連携推進部門において社会実装に関する取り組みを担うこととしている。令和5年度に新規採用した専任教員2名は、いずれも当該部門に配置される教員で、民間企業等で経験を積んだ者を採用した。このうち1名はベンチャー支援担当として配置し、今後は、URAと連携して社会実装の実現に向けた諸活動の展開を推進していく。</p> <p>また、関連企業のニーズ把握や連携強化に関しては、エムエススクエアの構想検討の段階から、その重要性が議論されてきた。このため、産学連携推進部門の業務の一つには「研究営業・研究広報」が盛り込まれている。</p> <p>上記体制による活動を開始して産学連携の取組をこれまで以上に活性化するとともに、令和8年度の組織完成に向けて、人員配置や人材育成等を含めた産学連携推進体制の整備に取り組み、社会実装に関する活動を加速させていく。</p>
4		本機構の運営に経営協議会学外委員がどのようにかわれるかについて、できるだけKPIを設定して、経営目標を数値化していただき、経営協議会と議論するというシステムにしていただきたい。共通に議論できるような物差しが必要である。	<p>これまで本学における企業ニーズの把握や連携は、教員個々の関係性を基にした取組が中心となっていた。しかし今後は、エムエススクエアの専任教員やURAを主体とした、エムエススクエア（産学連携推進部門）の「研究営業・研究広報」や「関連企業マッチング」の業務の中で、産学連携を組織的な取り組みとしても推進していく。</p> <p>また、KPIIに関しては、まずは中期目標・中期計画で設定した研究や産学連携に関する指標を数値目標とし、その進捗状況や評価・改善に関して経営協議会で議論していく。</p>

5	東京海洋大学海の研究戦略マネジメント機構の設置等について	<p>一つのプロジェクトを立ち上げて組織的な取り組みをしていくことは非常に素晴らしいこと。ぜひ成功させていただきたい。</p> <p>問題は、どのテーマを選んで、どこから資金を獲得するか。各教員は自分の研究分野を持っており、なかなかそこからでないのではないかと。組織として研究グループを作り、民間企業とつなげるには、相当なマネジメントが必要。研究テーマや研究計画の検討については、焦らず、しかし早く結果を出してほしい。</p>	<p>令和5年度においては、”執行部が本学の中期計画やビジョン2040を踏まえて設定した複数のテーマについて、学内から研究課題を公募し、応募課題の中から執行部が選定した課題に、学長裁量経費から研究資金を支援する”という取り組みを開始した。</p> <p>エムエススクエアでは、今後、研究IRを活用して、大学として戦略的に取り組む研究テーマを選定し、特に複数の研究分野に渡る学際的な研究について、学内教員の協働を促していく。また、「研究営業・研究広報」や「関連企業マッチング」などにより資金調達につなげられるよう、令和8年度の組織完成に向けて、戦略的な研究推進体制の構築を進めていきたい。</p> <p>また、水工連携に限らず学内の研究交流等を推進し、ボトムアップからも新たな領域の創成や創発的・挑戦的な研究が打ち出されるよう、学内の研究の活性化を促していく。</p>
6		<p>アメリカでは学位プログラムは当たり前であったが、日本の大学では組織が基本となっており、教員に授業が紐づいているため、学位プログラムという考え方がなかった。東京海洋大学において、やりやすい大学院から始めるというのは、望ましい形である。東京海洋大学は、明確な目的を持った大学であるため、学位プログラムは推進しやすいと思われる。モデルとなるような取り組みを期待している。</p>	
7	卓越大学院プログラムを学位プログラムに位置付けるための東京海洋大学大学院学則の一部改正について	<p>AIとデータサイエンスをとっかかりに、他の分野についてもプログラム化を推進していただくことを期待している。</p>	<p>今後、「海洋AI・データサイエンス学位プログラム」を契機として、学位プログラム制度を大学院全体に波及させていくことを計画している。学位プログラム制度では、社会のニーズに応じた柔軟な博士人材育成体制の機動的な構築が可能であるため、エムエススクエアで把握した社会からの研究や人材育成に対するニーズを積極的に取り入れた新たな学位プログラムを開設していく。学外の協力を得ながら大学が一丸となって推進していく必要があるため、理解促進を図っていく。</p>
8		<p>学位プログラムと海のエムエススクエアの話は、ぜひ一緒に学内外に説明していただき、エムエススクエアを浸透させていただくことも必要ではないか。</p> <p>エムエススクエアの議論では、東京海洋大学として何を推進していくのか幹を作るということだったと思う。本議論ではたまたま海洋データサイエンスというテーマだが、今後いくつかのテーマを増やしていき、その中で優先順位をつけて実施していく、という考え方でよいのか。</p>	